



絵本からの贈り物

園長 鳥塚 恵子

街の緑が少しずつ色づき始める11月。2学期も折り返し点となりました。

10月に行われた運動会は、保護者の皆様とともに、楽しいひと時を過ごすことができました。毎日の練習でも張り切っていた子どもたちですが、今年は親子で運動会を楽しんでもらう機会となり、子どもたちの笑顔が何倍にも輝いていました。ありがとうございました。運動会後も他学年の演技をまねて運動遊びを楽しんでいる子どもたちです。

さて、幼児期は体を動かすことと同様に、心を育てることが大切です。目に見えない心を育てる一つの方法として、絵本との関わりがあります。保育の中ではほぼ毎日絵本の読み聞かせをしています。乳児でも、自分のお気に入りの絵本を見つけてじっくりと見ている姿がどのお子さんにも見られます。また、ご家庭で絵本に親しめるよう4歳児は学級の本棚から、5歳児は2階廊下の本棚から自分で本を選び借りています。

ベネッセ教育総合研究所「幼児期から小学1年生の家庭教育調査・縦断調査(3歳児～5歳児)」(2014)によると、絵本や本の読み聞かせの頻度で「ほとんど毎日」が3歳児 31.8%、4歳児 22.5%、5歳児 17.8%になっています。一番多い「週に1～2日」では3歳児 26.1%、4歳児 30%、5歳児 30%でした。「月に1～3日」「ほとんどない」は年齢が高くなるにつれて増えていました。この結果から考えられるのは、大きくなるに従い、自分で読む子どもが増えていくということでしょうか。それとも本に接する機会が減っているということでしょうか。

年齢が上がるにつれて子どもが文字を読めるようになると、もう読み聞かせをしなくてもいいと思う保護者がいらっしゃるのかもしれませんが、ただ、文字が読めるようになっても継続して読み聞かせをすることは非常に大切です。読み聞かせは、読んでいる人や聞いている仲間と絵本の世界を共有することができ、絵本を読んでもらうプロセスに楽しさを感じられるからです。

絵本をお子さんと一緒に見る、読んで聞かせるという行為には子どもの想像力を養ったり、絵や文字に親しんだりといった、本そのものの魅力から得られるものがあります。同時に読んでくれる人の声が耳に心地よく響き、空間を共にするその人との親しさが育まれます。この感覚こそ「自分は安心してここにいてよい、愛されている」と子どもが実感する時なのです。大きな安心感に包まれることで子どもは、心が落ち着き自分から好奇心を働かせ物に関わっていきます。

今年度さくら和会文化部では、読み聞かせボランティアを募集しています。この機会にクラスの子どもたちに絵本を読む体験をしてみたいはいかがでしょうか。

最後に、どうぞ、秋の夜長にお子さんと共に絵本を読む時間をもつことで、絵本がもたらす贈り物を親子で受け取ってみてください。